Loma Linda International Dentist Program (IDP) 入学から卒業までの２１ヶ月

中出　修 (Osamu, Nakade)

現住所　136 102nd Ave SE, #313,
Bellevue, WA 98004
TEL&FAX　425-451-0081
e-mail　ONAKA77@aol.com

はじめに

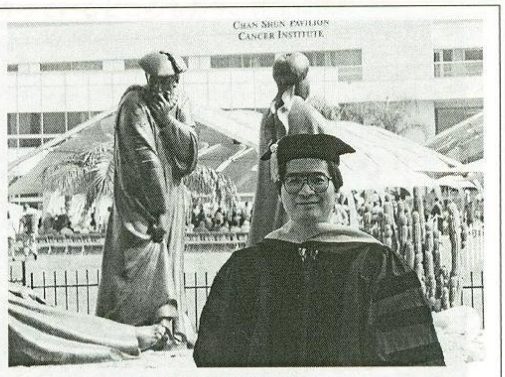
私、中出　修は北海道医療大歯学部口腔病理学講座在籍中に'93-95 に一度、Loma Linda VA Medical Center の Dr. Baylink およびDr. Lau の下で骨代謝の研究で留学していました。この時の体験が素晴らしく、アメリカにもう一度留学したいと思っていました。'95 年に一旦、日本の元の講座に戻り、その後６年に渡り、教育研究に励んでいました。骨代謝の研究で再び来る道もあり、いろいろ考えたのですが、研究者としての自分の能力に疑問を感じたこともあって、最終的に残りの人生を歯科臨床に捧げたいと '99 年に Loma Linda IDP の受験を決意、2001 年の９月に入学の運びとなりました。

今回、まだ卒業して半年未満のＩＤＰでの体験を思い起こしてみたいと思っています。興味のある方の参考になれば幸いです。

結論から先に言わせてもらえば、私の場合、IDP およびロマリンダ大歯学部への満足度は120%、つまり自分の期待を大きく上回るものでした。臨床研修の充実度および教員、スタッフの質の高さ等素晴らしかったの一言です。最近、IDP もDirector が退職したばかりで今後、大きく変貌する可能性がありますので、これから入学する方々が今後私の体験に当てはまるどうか多少、疑問が残りますが、私の体験を語りたいと思います。

IDP入学への条件

詳細に関しましては、Japan Club 発行の別冊入学体験記を参照していただきたいと思いますが、2004 年から大きく変わりそうなのは、今度の入学試験から今まで必須とはされていなかったNational Board Part II の合格が義務付けられそうなことです。詳しくは IDP に問い合わせて入試要項を手に入れるといいでしょう。従って、入学までの関門は TOEFL (> 550), Part I, Part II, 履歴、推薦状を元に書類選考で選ばれれば、入学試験を受験することができます。入学試験では実技試験と面接で最終的な合格者（通常年間１６名）が決定されます。応募者は年々増える傾向にあり、皆、すでに自国や他国での臨床および研究経験豊富な強者が多く、決して油断できません。



IDPの卒業式の日に

私の場合、Loma Linda U でかつてPost-doc ('93-95) をやった経験が大きく、かつてのボスのお推薦状や笠先生の推薦状が決めてとなったようで運良く合格できましたが、クラスメートはどれも、英語力、履歴等総合的に見ると潜在能力では私よりも優れていたように感じました。本当に今でもよく入れたなあと言いますか、よく入れてくれたなあと思っています。Loma Linda 大の温情なようなものを感じています。もちろん誰よりも強くLoma Linda に入学したいという強い意志は、自分にはあったように思いますし、入学までの試験等の準備は我ながら、よく集中できたなあと思っています。意欲だけで受かったと言っても過言ではないかと思います。

その他、入学に必要なものは、やはり資金でしょうね。全米で最も安い方と言っても、それでも授業料がものすごく高価ですからね。生活費は他の大都市の学校に比べ、かからないですし、実習に掛かる機材費はすべて含まれていますから、他校よりはトータルでお金は掛からないと言えますが。

入学直後の心境

英語力特に聞き取りの問題から、本当についていけるか？卒業できるか？と不安になったことを覚えています。授業の 70-80 % しか聞き取れないんですから。特に不安になったのは入学直後の救急蘇生の特別講義でしたね。英語力の無さが、命に直結するんですから、英語力の無さは深刻な問題だと不安になりました。その後はクラスメートやスタッフ、教員の助けもあり、徐々に順応はしていき、なんとか卒業できたのですが、いまだに英語力の問題がつきまとってきます。患者さんへの説明など、下手な英語でよくやっていけているなあと我ながら感心するやら、情けなくなるやらというのが正直なところです。自分の英語力は、アメリカで歯科医となるための最低のレベルだったと言っていいでしょうね。英語力はアメリカで働く

ロマリンダ大学歯学部

かぎり、つきまとってきますからね。そういう点で、入学前に徹底して英語力は鍛えてきた方がいいでしょうね。クラスメートは少なくとも私よりは英語力がありました。特にインド人などは母国語ですから、アクセントはひどいものの総合的な英語力には全く問題がなく、うらやましく思ったものです。しかしながら、考えてみれば、彼らは日本人よりは経済的に苦労していることが多く、そういう点で、神は平等な試練を与えているようにも感じたのも事実です。

学生生活全般

私が日本で歯科学生をしていた頃は、日本では卒業の一年半前から、病院での実習（通称ポリクリ）が主体となっていました。日本ではポリクリの時代は患者さんを診ることが主体で講義はほとんどありませんでした。従って、この期間は試験もほとんどなかったように思います。IDP 入学後も自分の場合、恐らく病院実習主体で講義、試験等はないものだと想像していましたが、 Loma Linda IDP は違っていました。約３０％の比率で臨床の講義が入り、それに伴う試験がありますので、病院での実習と講義等を並行してこなす必要があり、これが結構、大変でした。クイズといわれる小テストは頻繁にありますし、中間試験、最終試験と試験、試験に追われます。週末も試験勉強しなければならないことも少なくありませんでしたね。家族をショッピングモールに連れて行き、自分はフードコートで試験勉強というのがざらだったように思います。日本の大学で長年、教員をしていて、今さら、４０歳過ぎて、なんでこんなもの（試験）受けなければならないんだろうといつも思っていましたが、卒業するためには仕様がなかったんですね。もちろん、自分の実力を高める上で、不可欠な講義、試験でしたし、アメリカ流の歯科医学は日本とかなり異なっていましたから、アメリカ流を学ぶ上で、身になったのは疑いの余地はありません。

簡単に言いますと、日本の臨床の基礎実習からのカリキュラムを（通常、日本では３年かける）を２１ヶ月で行うと考えてもらえば分かりいいかもしれません。最初の一学期（quarter）特に、最初の２ヶ月ぐらいは臨床の基礎実習が主体で患者に接することはほとんどありません。小児歯科や矯正歯科などの講義はレギュラーの学生のクラスに組み込まれて一緒に講義、実習を受けます。前にも触れましたが、２学期目からは病院での患者さんの実際の診療が主体となり、講義、実習は約３０％ぐらいになります。最初の患者を診る時は本当にドキドキしました。何せ英語でしかもシステムの全く違うところで診療するのですから。幸運にも最初の患者さんはオリエンタルの人で、特に難しい症例でもなく、ホッとしたのを覚えています。応対の困難な気難しい患者さんも多くいて、英語力含めいろいろ苦情を言われたこともありました。一度、とても気難しい患者さんに痛い思いをさせ、患者さんが激怒し、担当を変えられたといいますか、降ろされたこともありました。そんな時はもちろん、こちらも傷つきますが、学ぶ側からすれば、こちらも痛い目にあった方が今でもいい教訓になっていることが多く、学生時代は、患者さんには申し訳ないけれども、失敗もまたいい勉強となることでしょう。患者さんは本当に誰よりもいい教師で、教えられることが多いというのが今でも実感です。もちろん、一方で私のことを気に入ってくれた患者さんも多くいてくれ、お菓子などを差し入れてくれる患者さんも結構多くいました。今でも、Loma Linda の患者さんから連絡があるくらいです。同じ診療を行なっているつもりですが、どうしても相性のいい患者さんとあまりよくない患者さんがでてきます。これは今後もきっと変わらないのだと思いますが、気難しい患者さんをどう上手く対応して、満足させていくのか、これからもっともっと勉強していかなければならないと思っているところです。

Loma Linda は他校に比べ、患者さんがとても豊富

で、臨床のケースは他校に比べ断トツに多いのが自慢です。大都市の歯科大など患者集めに苦労するらしいのですが、Loma Linda は本当に格段に恵まれています。私の場合も学生時代に６０人を越える患者さんが配当になり、ケースにはほとんど苦労しませんでした。ＩＤＰ　の場合、皆、他国ではすでに歯科医ですから、経験がありレギュラーの学生のいるメインのクリニック（ある日本の患者さんは大部屋と呼んでいた）で扱いきれない難症例の患者さんもIDP のクリニック（全く別のクリニックを持って、外国からの歯科医を卒後教育に近い形で教育するというのがLoma Linda IDP の大きな特徴で、これがここのIDPは人気の一つである）に回ってくるのもたびたびでした。この臨床教育（卒後教育を含めた）の充実度は Loma Linda の自負するところであり、ほとんどのすべての学生、教員は Loma Linda School of Dentistry is the best dental school in the world. を信じているのであります。事実の程はともかく、こういった母校への誇りを持たせる教育といいますか、誇りを感じさせる学校となるための努力は本当に素晴らしいなあと思います（ 注：他校出身者もまた自分の出身大学が一番と信じているのがアメリカの歯科大の特徴でもある）。診療におけるアシスタントは原則として付けることができず、学生は１人で全準備から後片づけまで何でもやらなければならず、そのため、患者さんの数は一日、多くても４人程でしたが、それでもとても忙しく動きまわっていました。インストラクターのチェックを受けるのに、列を作らなければならないのは学生の宿命で、私は日本では卒後、一応１７年のベテラン（臨床経験は浅いが）なんですが、こんな初歩的なことまで注意されるのかと自分のプライドが傷つけられ、情けなくなることもありましたが、今まで長年日本でやってきたことが、必ずしも正しいことばかりではないことが分かり、勉強になったのも事実でした。ここには経験豊富な実力のあるインストラクターが揃っています。スタッフ、教員ともに親切な方が多く、学生数もＩＤＰの場合は少ないので、皆、ファミリーのようでとてもいい関係が形成されていたように思います。

State Board（州開業資格試験）受験

このような学生生活が終盤に差し掛かると学生は、どこの州で働きたいかによって、State board を卒業数ヶ月前から卒業後（州によって、卒後しか受験を認めないなど、受験資格が異なる）。日本の場合、１回のペーパー試験のみで国家試験がすべて終了ですが、アメリカの歯科は非常に実践で活躍できる即戦力の歯科医の養成に力を注いでいます。最終関門がこの State Board ということになります。アメリカのState board は大きくは Western, North Eastern, Central, Southern に別れていて、その州が要求する State board を受けることになりますが、カリフォルニア、ネバダ、ノースキャロライナ等、その州独自の board を持っているところもあり、非常に複雑です。ただ一つどこかのState board を持って、そこで５年働けば、後は、どこでも働ける資格が得られるようになってきました。これも州によって異なる可能性があるので、詳細は各州の試験委員会に問い合わせた方がいいでしょう。試験の受験科目および判定基準も従って State board によって異なるなるので、それに合わせた準備が必要になってきます。一般にFilling の患者さん、２名、歯周病の患者さん、１名は準備しなければならず、その選定の善し悪しが合否を大きく左右するので、本当に患者さん探しは神経を使います。また必ずきてくれるという信頼のおける患者でなければならず、本当に大変な思いをします。その他、州によっては歯内療法の試験は抜去歯を使った根充まで試験がありますし、補綴は日本でいう臨床実地形式のペーパー試験が課せられます。またカリフォルニアなどは歯内療法の試験がない代わりに模型を使ったクラウンの形成の試験があったりと州によって受験要項が異なっています。私の場合、受験の前には、シアトルのあるワシントン州で働きたいと決めていましたので、ワシントン州が要求しているWestern board を受験しました。

カリフォルニアは第２希望でしたが、卒後の受験しか認められず、受験へのモチベーションが自分にはもうありませんでした。またその頃には自己資金も尽きていましたのであえて受験はしませんでした。

Western の患者さんは、日本人が２名、アメリカ人が１名でしたが、皆、素晴らしい患者さんで、無事合格することができました。合格率は Western の場合９０％ぐらいと高く、最も合格しやすい、なおかつ試験官がとても親切と言われ、試験時間も充分にあり、ストレスの低い board として知られています。一方、カリフォルニアなどは歯科医師過剰を反映してか、試験官も意地悪な感じと言われ、合格率も低く、時間制限も厳しく、非常にタフなboardとして知られています。ちなみに私のクラスメートは私を含め、Western 受験が４名。 North Eastren １名、Southern １名、ノースキャロライナ１名、カリフォルニア２名が受験し、全員が合格しています。

精神教育の重視の姿勢

水曜の朝には教会での礼拝の時間が１時間設けられ、クリスチャンでなくとも出席が義務付けられています。レギュラーの学生のほとんどはLoma Linda U の母体である Seventh-Day Adventist (SDA) の信者ですが、IDP の学生は逆にほとんどの学生が SDAではなく、私もＳＤＡ でもなくクリスチャンではありませんが、キリスト教の精神は大好きですし、賛美歌を歌うのが楽しかったので、今では水曜の教会はいい想い出として残っています。この他にもキリスト教、特に Loma Linda U の母体である Seventh-Day Adventist (SDA) の講義も合計２学期、用意され、学生の精神お

で、臨床のケースは他校に比べ断トツに多いのが自慢です。大都市の歯科大など患者集めに苦労するらしいのですが、Loma Linda は本当に格段に恵まれています。私の場合も学生時代に６０人を越える患者さんが配当になり、ケースにはほとんど苦労しませんでした。IDP の場合、皆、他国ではすでに歯科医ですから、経験がありレギュラーの学生のいるメインのクリニック（ある日本の患者さんは大部屋と呼んでいた）で扱いきれない難症例の患者さんもIDP のクリニック（全く別のクリニックを持って、外国からの歯科医を卒後教育に近い形で教育するというのがLoma Linda IDP の大きな特徴で、これがここのIDPは人気の一つである）に回ってくるのもたびたびでした。この臨床教育（卒後教育を含めた）の充実度は Loma Linda の自負するところであり、ほとんどのすべての学生、教員は Loma Linda School of Dentistry is the best dental school in the world. を信じているのであります。事実の程はともかく、こういった母校への誇りを持たせる教育といいますか、誇りを感じさせる学校となるための努力は本当に素晴らしいなあと思います（ 注：他校出身者もまた自分の出身大学が一番と信じているのがアメリカの歯科大の特徴でもある）。診療におけるアシスタントは原則として付けることができず、学生は１人で全準備から後片づけまで何でもやらなければならず、そのため、患者さんの数は一日、多くても４人程でしたが、それでもとても忙しく動きまわっていました。インストラクターのチェックを受けるのに、列を作らなければならないのは学生の宿命で、私は日本では卒後、一応１７年のベテラン（臨床経験は浅いが）なんですが、こんな初歩的なことまで注意されるのかと自分のプライドが傷つけられ、情けなくなることもありましたが、今まで長年日本でやってきたことが、必ずしも正しいことばかりではないことが分かり、勉強になったのも事実でした。ここには経験豊富な実力のあるインストラクターが揃っています。スタッフ、教員ともに親切な方が多く、学生数もＩＤＰの場合は少ないので、皆、ファミリーのようでとてもいい関係が形成されていたように思います。

State Board（州開業資格試験）受験

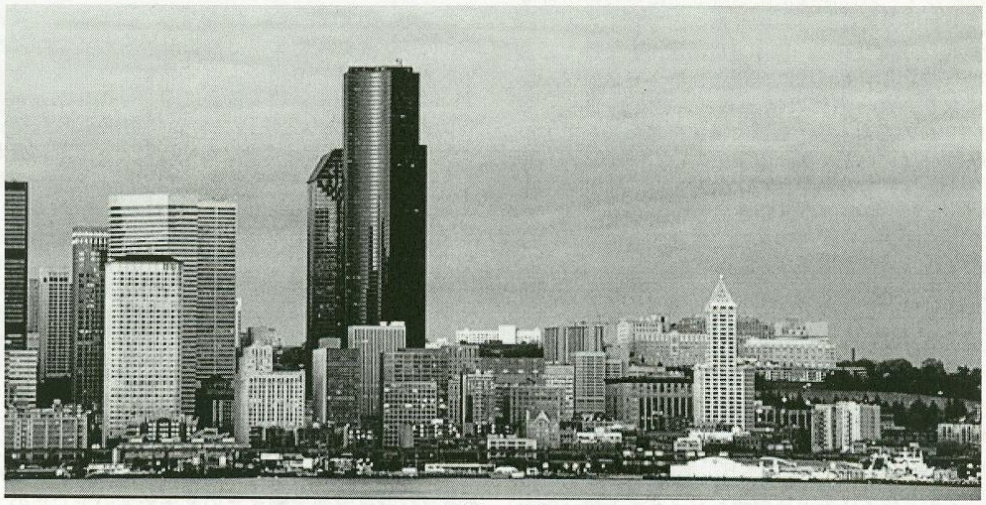
このような学生生活が終盤に差し掛かると学生は、どこの州で働きたいかによって、State board を卒業数ヶ月前から卒業後（州によって、卒後しか受験を認めないなど、受験資格が異なる）。日本の場合、１回のペーパー試験のみで国家試験がすべて終了ですが、アメリカの歯科は非常に実践で活躍できる即戦力の歯科医の養成に力を注いでいます。最終関門がこの State Board ということになります。アメリカのState board は大きくは Western, North Eastern, Central, Southern に別れていて、その州が要求する State board を受けることになりますが、カリフォルニア、ネバダ、ノースキャロライナ等、その州独自の board を持っているところもあり、非常に複雑です。ただ一つどこかのState board を持って、そこで５年働けば、後は、どこでも働ける資格が得られるようになってきました。これも州によって異なる可能性があるので、詳細は各州の試験委員会に問い合わせた方がいいでしょう。試験の受験科目および判定基準も従って State board によって異なるなるので、それに合わせた準備が必要になってきます。一般にFilling の患者さん、２名、歯周病の患者さん、１名は準備しなければならず、その選定の善し悪しが合否を大きく左右するので、本当に患者さん探しは神経を使います。また必ずきてくれるという信頼のおける患者でなければならず、本当に大変な思いをします。その他、州によっては歯内療法の試験は抜去歯を使った根充まで試験がありますし、補綴は日本でいう臨床実地形式のペーパー試験が課せられます。またカリフォルニアなどは歯内療法の試験がない代わりに模型を使ったクラウンの形成の試験があったりと州によって受験要項が異なっています。私の場合、受験の前には、シアトルのあるワシントン州で働きたいと決めていましたので、ワシントン州が要求しているWestern board を受験しました。

カリフォルニアは第２希望でしたが、卒後の受験しか認められず、受験へのモチベーションが自分にはもうありませんでした。またその頃には自己資金も尽きていましたのであえて受験はしませんでした。

Western の患者さんは、日本人が２名、アメリカ人が１名でしたが、皆、素晴らしい患者さんで、無事合格することができました。合格率は Western の場合９０％ぐらいと高く、最も合格しやすい、なおかつ試験官がとても親切と言われ、試験時間も充分にあり、ストレスの低い board として知られています。一方、カリフォルニアなどは歯科医師過剰を反映してか、試験官も意地悪な感じと言われ、合格率も低く、時間制限も厳しく、非常にタフなboardとして知られています。ちなみに私のクラスメートは私を含め、Western 受験が４名。 North Eastren １名、Southern １名、ノースキャロライナ１名、カリフォルニア２名が受験し、全員が合格しています。

精神教育の重視の姿勢

水曜の朝には教会での礼拝の時間が１時間設けられ、クリスチャンでなくとも出席が義務付けられています。レギュラーの学生のほとんどはLoma Linda U の母体である Seventh-Day Adventist (SDA) の信者ですが、IDP の学生は逆にほとんどの学生が SDAではなく、私もＳＤＡ でもなくクリスチャンではありませんが、キリスト教の精神は大好きですし、賛美歌を歌うのが楽しかったので、今では水曜の教会はいい想い出として残っています。この他にもキリスト教、特に Loma Linda U の母体である Seventh-Day Adventist (SDA) の講義も合計２学期、用意され、学生の精神お



シアトルの町

よび道徳教育がきちんとなされているなあという印象を受けました。教会でも宗教の講義でも他の宗教を尊重する姿勢が重視されており、決して SDA を押し付けることはなかったのはとても納得できるものでした。

私にとってのLoma Linda

最初の留学で、自分にとってはとてつもなく視野が大きく広がりました。それまでは日本という枠の中での思考しかできませんでしたが、もう一本思考の軸が増えたようなそんな感じでしょうか。世界的な見方ができるようになったような気がします。人生観を大きく変えてくれた２年間でした。研究でも学ぶ点が多かったですね。この２年間は今までの人生の中でも最も充実し、幸福な２年間でした。Japan Club のお蔭で、日本の研究者の方々とも知り合うことができ、ホームパーティ等で楽しいひとときを過ごすことも多かったですね。最初の留学を一言で表現するなら、充実でしょうかね。何をやっても楽しかったような気がします。一方、２回目の留学IDPではアメリカの歯科教育に触れることができましたし、アメリカ式の歯科臨床をいっぱい学ぶことができました。ただ、精神的にはしんどかったですね。家族も全員、苦しかったと思います。この違いはどこから来たのかはっきり答えることは出来ませんが、一つには自分たちの目が肥えて来てアメリカの矛盾点、問題点に気づいたことがあると思います。経済的にも、２回目は楽ではなかったこと、また自分に関しましては試験の多い学生生活は何かとストレスが多かったのかもしれません。学生生活は充実はしていましたが、日々の生活は決して楽しいと言えるものではありませんでした。２回目の留学を一言で言うなら、悲壮という言葉が適当かもしれません。このように１回目の留学と２回目の留学では印象が180 度違っているのですが、Loma Linda はわれわれを大きく育ててくれたところですね、感謝の一言です。もし、最初の留学先が Loma Linda でなかったなら、IDP への挑戦もなかった可能性が高かったと思います。私の第一の故郷は福井で、第二の故郷は北海道で、第三の故郷は Loma Linda と言えます。そして今、住んでいる Washington州が第四の故郷ということになるのかもしれません。

Loma Linda からSeattle へ

2003 年の６月に Loma Linda の歯学部を卒業し、７月にSeattle 近郊の Bellevue という街に引っ越して来て、早、３ヶ月以上が経過しました。Washington 州は Evergreen State の別名がある通り、Bellevue の辺りは、緑豊かで、自然には本当に恵まれています。湖も数多くあり、タコマ富士の別名で知られる Mt. Rainer、海、川、森、すべてが揃う場所で、シーフードがおいしいのもうれしい限りです。長年、住んだ北海道を思い出させてくれるようなそんな土地です。芸術への市民の関心も高く、音楽、美術などにも身近に接することができます。人々は温かく、アジア人、特に対日感情のいい土地ですので、日本人には、住みやすいところです。冬も東海岸ほど寒くはありません。南カリフォルニアが太陽の恵みを感じるところならば、ここSeattle 近郊は水の恵みを感じるところと言えるのかもしれません。空気が澄んでおり、水もおいしいところです。われわれにとってこの地を選んだのは今のところ、正解だったようです。

現在の仕事について、少しお話したいと思います。就職活動はなかなか簡単には行きませんでした。英語力の問題もあったと思います。なかなか採用してくれるところは見つかりませんでした。最終的には Loma Linda 時代の友人の紹介で、今の職場（West Seattle の個人開業医）に決まりましたが、一時は田舎に単身赴任を考えたほどでした。今の職場の患者さんの大半は生活保護を受けている患者さんで、治療費用はいっさい、Washington 州が支払うタイプの保険の患者さんが多いのですが、薬物中毒など様々な問題を抱えている患者さんも少なくなく、苦労することも少なくありません。このような患者さんの中には、精神的に異常をきたしていたり、お金を目的に歯科医相手に訴訟を起こす患者さんも少なくないので、自分に勤まるかどうか、最初は不安になりましたが、最近はこのような人々に仕える歯科医も社会には必要だと思えるようになり、誠心誠意尽くすよう心がけるようにしています。生活保護の歯科保険の場合、診療報酬が特に低く抑えられているため、採算ラインを確保するには、コストを切り詰め、短時間で多くの患者さんを診なければならないなど、他の面でも大変なんですが、今はいろいろ勉強になることも多く、いろんな面で修業させてもらっています。診療時間は月から木までの週４日で、朝の８時から夜の７時まで、一日１０時間、週４０時間勤務です。１１月からは金曜も別の歯科医院で働き始めることが決まっていますので、今の週休３日の生活も残りわずかとなってきました。将来的には自分の Office を持ちたいと思っていますが、永住権もまだ取得できていませんし、いつになるのか今は全く未定で状態です。絶えず向上心を忘れず、患者さんに奉仕できればと思っているところです。

同じような夢を持っている方への助言があるとしたら？挑戦したい人が近くにいたら？

答えはうーん、でしょうね。頑張ってほしいですね。私がアメリカでやりたいと言った時も、身内もアメリカ在住者の友人も誰もが皆、うーんでしたがね。今になって、皆が諸手を上げて賛成しなかったのがよく分かります。リスクが高すぎますものね。最初の留学で、英語の家庭教師をしてくれた Steve というのがいて、今は日本の秋田で英語の補助教員をやっているのですが、僕の挑戦を見て、彼いわく "You are so brave". って言っていますからね。彼は、自分には言葉の違う外国で永住めざし仕事をやっていく勇気など到底ないって言うのですね。しかも４０歳過ぎて、家族を持って。よくやるわ、ぐらいの感じなんでしょうか。もちろん、今後、日本でそのような夢を持っている方がいたら、目標に挑戦してもらいたいのはもらいたいですね。自分には、そのような方の気持ちが、一番良く分かりますから。自分も自分の人生に後悔したくない、のそれだけでしたからね。余り深くは後先、考えませんでした。とにかく、やるしかないと。でも、挑戦したい方に言いたいのですが、やるには条件もあると思いますよ。誰でも彼でもという訳にはいかないと思います。まず、考えられる第一は、どうしてもアメリカでやっていきたいという強い気持ちでしょうね。いくつもの関門や困難が待っていますから、それを乗り越えられる精神力がないとなかなか難しいのではないでしょうか。第二にやはり、英語力でしょうか。僕ぐらいの英語力が最低条件でしょうから。第三に先立つ物の確保、つまり資金の調達をどうするか。授業料、生活費とかかる費用は莫大ですから。第四に永住権などの卒業後、長期に働くためのビザがの確保ができるかどうか？ではないでしょうか。アメリカは September 11 の同時多発テロ以来、移民に対して締めつけを強めていますからね。歯科医になれれば、通常は、H1-B というスポンサーを要する労働ビザを取得し、延長を入れて６年、スポンサーの下で働き、その間に永住権を申請、所得する訳ですが、H1-B で働いている６年の間に永住権が取得できないと、帰国せざるを得ないということも考えられない事態ではないですかね。これからも移民への政策が刻々変わる可能性もあります。ビザに関してもよく調べた方がいいかと思います。

最後に

今、一つの念願が叶って、アメリカで働けるようにやっとなったんですが、９９年に入学のために試験勉強を始め、４年掛かったことになります。長かったといえば、長かったですね。自分ではこの上ない充実感と言いますか達成感はありますね。自分の能力の限界に近いところでの挑戦だったと思っていますから。両親、家族、恩師、友人、笠先生、久子さん始めJapan Club の方々、IDP ご出身のヒューストンの清水直樹先生、LLU 歯学部ご卒業の松井克子先生および日本の母校、北海道医療大学の方々のご支援、ご助言等があって、やっとここまで来れました。本当に、皆様に感謝しています。今後もLoma Linda にはちょくちょく里帰り出来たらと思っています。これからもよろしくお願いします。